

# 心理学関連学科学生の情報環境と情報リテラシー能力に関する横断的・縦断的調査

——心理学専門基礎教育の情報化をめざして——

心理学科 仲谷兼人・川上正浩

**抄録：**大学教育の情報化は時代の趨勢であるが、学生をとりまく情報環境はそれを遙かに超える速度で変化し続けている。本研究では専門教育における多様な要求に応えるプログラム開発の基礎資料として、心理学関連学科に在籍する学生を対象に、所有する情報環境とリテラシー能力に関する質問紙調査を横断的・縦断的に実施した。調査結果からは着実な情報環境の充実とリテラシー能力の向上が確認されたが、携帯電話、携帯メールの急速な普及など新たに検討すべき要素が付け加わったことも示された。また情報環境、リテラシー能力と基礎教育科目の評価の間に関連性が認められることについても検討がなされた。

**索引語：**心理学専門基礎教育 情報環境 情報リテラシー

## はじめに

教育場面におけるコンピュータの利用は大学を初めとする高等教育機関においてのみならず、ひろく初等教育の段階から積極的に導入が進められている。さらに、そのようにしていれば与えられる「情報教育」を尻目に、家庭へのパソコン、インターネットの普及、個人への携帯電話の普及にみられるように生活全体の情報化は予測を超えた速度と広がりをもって進展している。

大学のような教育機関における教育実践活動にコンピュータを利用することは、教育の効率化と内容の充実を図るという本来の目的の他に、大学をとりまく様々な問題状況を乗り切るための経済的側面からも不可欠である。「教育の情報化」に関わるテーマは広範に及ぶが、この研究ではとくに心理学関連学科の新設という時期をとらえ、「教育を受ける立場の学生の状況を知ること」に重点を置いた。教育が教育を施す側と受ける側の相互の動きかけによってなりたつものである以上、

互いの状況を明らかにすることが、効率的な運営のためにも重要であると考えられるからである。

## 研究の目的

本研究は科学研究費・特定領域研究（A）『高度教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究』（領域番号：120、研究代表者：坂元 昂）の公募研究として採択された「コンピュータを利用した心理学専門基礎教育プログラムの評価と開発」（課題番号 13020246 研究代表者：小嶋 秀夫）の一部を構成している。（小嶋 他 2002、伊原 他 2001、伊原 他 2002、仲谷 他 2002）これは単年度課題であり、それに続く縦断的研究については平成 14、15 年度大阪樟蔭女子大学特別研究費の交付を受けて実施された。

「心理学専門カリキュラムにおける、現行のコンピュータ利用実践の評価と、新しい教育プログラムの開発を行うこと」が上記研究の基本的な目的である。本研究はその一環として、個々の学生の

個人特性と環境の特徴を把握し、それらとコンピュータを利用した教育への適応との関連性の解明を目指すものである。

## 調査

### 方法

時系列に沿った変化を詳細に追うために、本研究では2つのアプローチをとった。その1つはある時点で各学年を対象に一齐に同じ内容の調査を実施し、それを比較して「学年差」を明らかにする横断的調査、もう一つは学生側の諸条件の違いと、教育プログラムの違いなどに起因する入学年コホート差を明らかにするために新入生に毎年同内容の調査を実施する縦断的調査である。調査・研究は京都学園大学と大阪樟蔭女子大学で行われた。

### 対象

調査対象は両大学の心理学専攻学生である。2001年度の横断的調査では、京都学園大学の1年次から3年次までの学生を対象とした。また2001年度以降継続している縦断的調査では大阪樟蔭女子大学心理学科の1年生を対象としている。

### 調査の内容

まず、学生側の諸条件（個人の情報環境、コンピュータ利用状況、コンピュータを利用した授業への評価、心理学についてもっているイメージ、パーソナリティ特性、論理的推論能力、学習達成度など）に関する多面的情報を、学生に対する質問紙調査を中心として収集した。それに加えて、心理学専門科目授業担当教員からの成績評価データを利用した。学生が提供した個人的情報の保護と、それが成績に影響しないことを保証した。

### 第1回調査

対象：1) 京都学園大学人間文化学部人間関係学科1年生126名、2年生94名、3年生101名。

2) 大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科1年生144名。全般的な調査内容はほぼ共通であるが、学年や各大学のカリキュラム構成によって、質問紙構成は異なる。

調査時期：2001年5月。

学生の情報環境、心理学イメージ、人格特性(self efficacy)、授業の履修状況などに関する質問紙調査を行った。質問項目の一覧は資料に収録した。授業時間内の一斉実施を原則としたが、一部の学生には個別配布して後日回収した。

### 第2回調査

対象：大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科1年生140名。調査内容はほぼ共通であるが、一部追加項目を含む。配布、収集手続きについては第1回調査と同じ。

調査時期：2002年6月。

### 第3回調査

対象：第2回調査と同じ。ただし、この結果の分析は本稿には含まれない。

調査時期：2003年9月。

なお、この縦断的調査については2004年度まで同じ条件で毎年実施して学科開設から4年間の資料を蓄積し、改めて分析する予定である。

## 調査の結果と分析

本稿では実施した質問紙のうちQ1からQ11まで、学生の情報教育の経験と情報環境に関するものについて検討と分析を進める。

以下、質問項目順に得られた結果を検討していく。文中( )内および図中の(学園)は京都学園大学、(樟蔭)は大阪樟蔭女子大学をさし、学校名に続く数字は学年と調査年度を示す。たとえば、「樟蔭1'02」は2002年度に調査した大阪樟蔭女子大学の1年生のデータであることを示している。

### 1. パソコン所持の形態と学年別変化 (Q1)

京都学園大では学年進行とともに自分専用のパソコンの所持が増える。それにつれて大学に設置されたパソコンの利用が相対的に減る。当初からノートパソコンの所持を義務づけている大阪樟蔭女子大では大学設置のパソコンはほとんど利用されていない。自分専用と自宅共用をあわせると自宅に情報環境があるかどうかを示すことになるが、この比率は京都学園大の入学時には約50%、学年進行とともに上昇して3年生では約80%となる (Fig. 1)。大阪樟蔭女子大学の場合、実際に自宅で使っているかどうかの問題となるが、これについてはQ4, Q5で検討する。

### 2. 入学前のパソコン教育経験 (Q2)

京都学園大では入学年次が新しいほど (質問紙

調査実施時に低学年であるほど) 入学前にパソコン教育を受けた経験を持つ学生の割合が高い。両大学での質問項目に若干の相違があり、大阪樟蔭女子大学の調査では入学前に「学校」で受けた教育経験についてたずねたのに対し、京都学園大ではクラブや家庭内での経験も含めている。

大阪樟蔭女子大学では2001年度の新入生の入学前教育比率が72%、2002年度新入生では84%となり、教育経験が着実に増加していることが示されている (Fig. 2)。

### 3. 入学前経験の内容 (Q3)

Table 1に示した入学前の教育経験ではワープロの比率が高いことが目立つ。京都学園大では学年による経験内容の差も読みとれる。インターネットとメールの利用については低学年ほど経験して

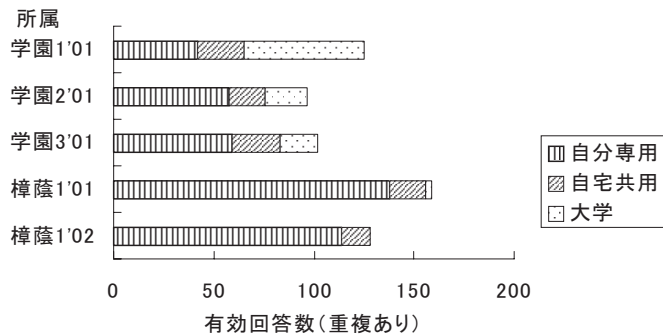


Fig.1 パソコンの所有と利用形態

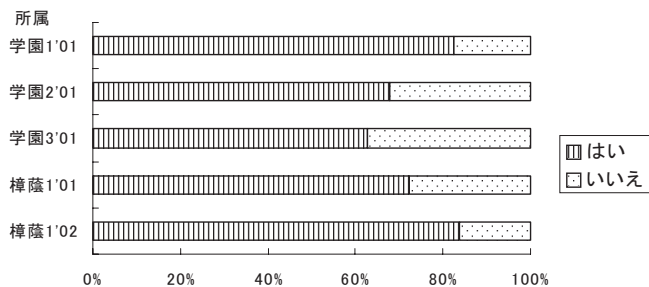


Fig.2 入学前のパソコン教育

Table.1 入学前経験の内容

所属	ワープロ	表計算	インターネット	メール	プログラミング	その他	有効回答数
学園1'01	95.2	50.0	59.5	41.7	26.2	6.0	108
学園2'01	92.6	29.4	39.7	23.5	8.8	2.9	68
学園3'01	79.7	30.4	34.8	20.3	18.8	17.4	69
樟蔭1'01	78.8	36.5	16.3	10.6	6.7	22.1	104
樟蔭1'02	77.8	19.4	47.2	31.5	7.4	8.3	10.8

\*数字は%、重複回答有

いる割合が高いが、これは社会におけるインターネット環境の急速な普及を反映していると思われる。大阪樟蔭女子大のデータでも明らかに2001年度入学者のインターネット、メールの経験が少ないが、調査が学校教育による経験だけを対象にしていることによるものであろう。情報リテラシー教育が必ずしもネットワーク環境の存在を前提とせず、スタンドアロンのパソコン利用から入るという傾向があったことの現れと考える。

#### 4. パソコンの授業外利用 (Q4) と使い道 (Q5)

Fig. 3 では授業時間以外でのパソコン利用についての調査結果を示している。

また Table 2 はその使い道についてたずねている。

京都学園大では1年生の授業外使用は42パーセントにとどまるが、2年生では91パーセントの高率に昇る。3年生では86パーセントであり、学年進行あるいは大学における教育によって利用率が劇的に向上することがわかる。全学年を通して、使用目的の中でインターネット、メールが高

い割合を占めている。1年生においてはワープロ、表計算の頻度が低いことが目をひくが、2年生以降ではこれらの利用が急激に増える。これはリテラシー教育の進展とカリキュラムの深化によるものであろう。

大阪樟蔭女子大では67パーセントの学生が授業外でパソコンを使用している。使い道ではワープロ、インターネット、さらにメールの利用が多い。表計算の利用は入学前の経験に比べて低くどまっているが、それは必要性の問題であらう。自由記述に見られたその他の用途の中で目立つのはゲームである。京都学園大の1年生と比較したとき、「情報環境を身近にする」ためにノートパソコン所持を義務づけた成果はある程度認められるが、それでも1/3の学生は授業以外では使用していない。この比率が学年進行に伴って変化するかどうか、経過を観察する必要があると思われる。

プログラミングについては全般的にほとんど利用されていない。パソコンの使い道として、すでに一般的ではなくなっているということであらう。

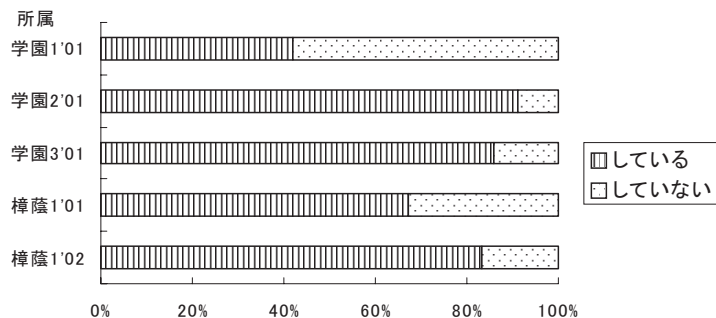


Fig.3 パソコンの授業外使用

Table 2 授業以外のパソコンの使い道

所属	ワープロ	表計算	インターネット	メール	プログラミング	その他	有効回答数
学園1'01	28.3	0.0	81.1	52.8	0.0	15.1	53
学園2'01	81.9	49.4	79.5	49.4	2.4	8.4	83
学園3'01	80.2	41.9	88.4	66.3	3.5	14.0	86
樟蔭1'01	62.5	9.4	64.6	36.5	3.1	25.0	96
樟蔭1'02	75.2	34.3	74.3	35.2	1.9	8.6	105

\*数字は%、重複回答有

## 5. パソコンの経験年数 (Q6)

Table 3 はパソコンの経験年数を示している。

Table 3 パソコンの経験年数

経験年数	学園1'01	学園2'01	学園3'01	樟蔭1'01	樟蔭1'02
3年以上	23	11	18	10	22
3年～2年	14	8	33	13	17
1年～2年	14	24	28	16	13
1年～半年	23	39	19	25	14
半年以内	26	19	2	35	33

\*数字は%

京都学園大学、大阪樟蔭女子大学ともに、1年生ではパソコン経験は半年以内が最大の割合で、以下順次割合は低下する。しかし3年以上の経験を持つ学生も相当数存在し、情報機器の普及が早い段階から進んでいることを示す。一方で京都学園大の2年生、3年生の調査からは、入学後に初めてパソコンに接する学生がかなりいることも読みとれる。

## 6. 毎日のパソコン使用時間 (Q7)

Table 4 は大阪樟蔭女子大学1年生の毎日のパソコン使用時間である。

使用時間はおおむね比較的短い、かなりの時間パソコンを利用している学生もいる。2001年度調査に比べ、2002年度調査では長時間パソコンを使用する学生の割合が増加している。クロス集計表に基づく独立性の検定の結果、2001年度調査では使用時間とメール、ワープロの使用の間

Table 4 毎日の使用時間

	樟蔭1'01	樟蔭1'02
3時間以上	7	5
2～3時間	7	36
1～2時間	21	47
30分～1時間	27	12
30分以下	38	1
サンプル数	97	104

\*数字は%

に、また2002年度調査では使用時間とワープロの使用の間に有意な関連が認められた。毎日の使

用時間の長い学生ほどメールやワープロを利用しているという傾向がある。

## 7. パソコン作業能力の自己評価 (Q8)

Fig. 4 はワープロによる文書作成について、Fig. 5 は表計算によるデータ集計についての自己評価である。

どちらも学年が上がるにつれて評価も上がっているが、とくに京都学園大3年生の表計算について顕著な向上が見られる。これは情報処理教育に関するカリキュラムの進行に伴うものと考えられる。どの学年集団においてもワープロと表計算の技術に対する自己評価間にはクロス集計表に基づく独立性の検定で有意な関連が認められた。

## 8. 携帯電話とパソコンの利用について (Q9)

Table 5 は日常的な作業に携帯電話とパソコンをどう使い分けているかを示している。

メールを読む、書くという用途には極めて高い割合で携帯電話が使われている。京都学園大では調査した3学年を通じてほぼ9割の学生がメールの読み、書きに携帯電話を利用しており、大阪樟蔭女子大ではさらに高率である。パソコンの用途を聞いたときには (Table 3, Q5) かなりの

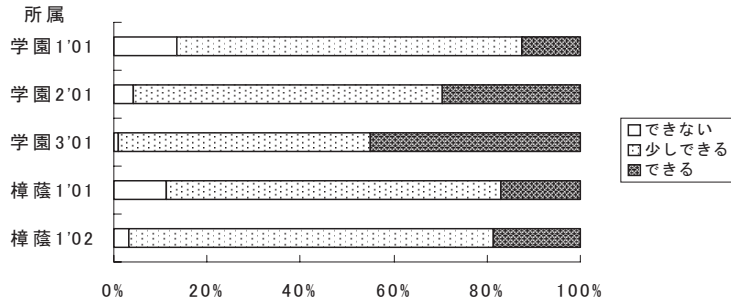


Fig.4 ワープロ作業の自己評価

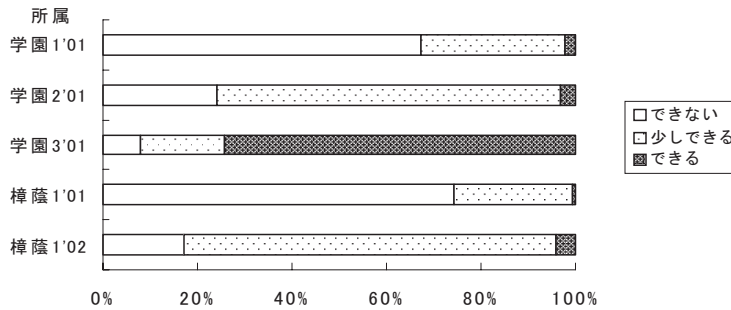


Fig.5 表計算作業の自己評価

Table 5 携帯電話の利用比率

	メールを読む	メールを書く	インターネット
学園1'01	93.7	95	34.2
学園2'01	89.7	92.3	11.1
学園3'01	91.3	91.3	9.9
樟蔭1'01	95.7	97.2	44.1
樟蔭1'02	100	99.1	15.6

\*数字は%

メール利用があげられているが、日常的にどちらかといえば明らかに携帯電話ということであろう。これは両者のメールの性格が異なることを意味しているのかも知れない。ケータイメールはチャット、パソコンメールは手紙に近い性格を持つと考えられるが、目的、内容、送受先など細かな点に立ち入った検討を待たなくてはならないだろう。

インターネットの利用については対照的にパソコン利用が上回るが、1年生では携帯電話もよく

使われている。これは主に利用するサイトのコンテンツ、設計にもよるだろう。京都学園大の2年生、3年生ではメールとは逆に9割の学生がパソコンを利用している。ここでは携帯電話とパソコンの用途の棲み分けがはっきり進んでいることが示されていると考えられる。2002年度の大阪樟蔭女子大学における調査でもこの傾向は明らかであり、学生をとりまく情報環境が急速に充実していることが推測される。

### 9. どちらを先に使い始めたか (Q10)

Table 6は携帯電話とパソコンのどちらを先に使い始めたかを示している。

京都学園大では1、2年生では携帯電話を先に使い始めた学生が多いが、3年生になると逆転してパソコンから先に使い始めた学生の割合が

Table 6 どちらが先か

	携帯電話が先	パソコンが先
学園1'01	62.5	37.5
学園2'01	67.9	32.1
学園3'01	47.8	52.2
樟蔭1'01	80.2	19.7
樟蔭1'02	77.4	22.6

\*数字は%

高くなる。これは携帯電話、とくにi-modeの普及時期と関係すると思われる。i-modeのサービス開始(1999年2月22日)は調査時点からさかのぼるとおよそ2年前になるが、これは携帯電話自体の契約数の爆発的な増加のきっかけともなった。i-mode以降、携帯電話が情報端末として位置づけられたとしてもいいだろう。それ以前には事実上情報端末の選択という機会はなかったわけだ。

大阪樟蔭女子大学では携帯電話を先に使い始めた学生が8割を占める。これを先のTable 5の結果と照らし合わせると、同学の学生が携帯電話の利用に傾いていることが示される。

Table 7 情報機器の使用の順とインターネットの利用

		どちらを先に使い始めたか			
		全体	携帯電話	パソコン	不明
インターネット どちらを使うか	全体	144	114	28	2
	パソコン	76	53	22	1
	携帯電話	60	54	6	0
	不明	8	7	0	1

独立性の検定 \*\*1%有意

 $\chi^2$ 乗値 自由度 P値 判定  
7.579 1 0.0059 \*\*

Table 7は「携帯電話とパソコン、どちらを先に使い始めたか(Q10)」と「インターネットに何を使うか(Q9)」の関係を示すクロス集計表である。

データは大阪樟蔭女子大の1年生を対象にしたものだが、この結果から「どちらを先に使い始めたか」が以後のインターネットの使い方に強い影響を与えることがわかる。パソコンから入った学生はネット利用にパソコンを使い続ける傾向が明らかである。

京都学園大1年生でも同様に、「どちらを先に

使い始めたか」が「インターネットでどちらを使うか」と有意に関連している。しかし、2年生以上ではインターネット利用がほぼパソコンに限られるためこの関係は認められない。同様に2002年度の大阪樟蔭女子大学1年生を対象にした調査でも同じ理由でこの関係は確認されなかった。

メールについてはどちらの大学での調査でもパソコンの利用がほとんどなく、Q10との関係について論じることはできない。

ここでも携帯電話とパソコンの棲み分けが進んでいることが明らかになった。学生個人の携帯電話に対する依存度の高まりや情報機器としての重要性が増す中で、携帯電話の役割を教育の視点から検討する必要があると考える。

### 情報環境、情報経験と学業成績について

学生にとっての情報環境の充実が学業成績の向上につながるかどうかは興味深い問題である。コンピュータを利用した教育を推進する立場からは肯定的な結果が望ましいわけだが、環境整備が端的に学業成績に反映されると主張するのは我田引水のきらいがある。そこで幾つかの質問項目について心理学基礎教育科目の成績との関連を調べてみた。

Table 8は2001年度樟蔭女子大学1年生春学期に配当された「心理学実験基礎実習A」の評価と授業時間外のパソコン使用の有無についてのクロス集計表である。この科目の評価は5つのカテゴリ A,B,C,F,Nを用いて行われ、それぞれ優,良,可,不可,評価なしに相当するとみなせる。

独立性の検定によれば、この科目の評価と授業時間外にパソコンを使用することの間には有意な関連が認められる。秋学期に開講された心理学実験基礎実習Bでもこのような傾向は見られたが、有意な水準ではなかった。また、2002年度の調査に置いてもこの傾向は認められなかった。科目

Table 8 心理学実験基礎実習 A の評価と授業外パソコン使用の関係

		成績評価						
		A	B	C	F	N	不明	
授業時間外 パソコン使用	全体	144	76	49	8	8	2	1
	あり	97	59	26	5	4	2	1
	なし	47	17	23	3	4	0	0
独立性の検定		*5%有意						
$\chi^2$ 乗値	自由度	P 値	判定					
10.3151	4	0.0354	*					

の評価は習得の程度を直ちに反映しているものではなく、詳述しがたい様々なバイアスを受けている。さらに分析を進めるためには測度、指標の検討が不可欠であると思われる。

同様の手法によれば、心理学実験基礎実習 A と B の評価間（2001 年度）、心理学実験基礎実習 B の評価と表計算の習熟度の自己評価（2001 年度）、心理学実験基礎実習 A の評価と表計算の習熟度の自己評価（2002 年度）の間にも有意な関連が認められた。

1 年生配当のコンピュータ関連科目としては、他に心理統計法 A（春学期）、同 B（秋学期）がある。同様のクロス集計表による分析では同時期に開講された心理学実験基礎実習 A と心理統計法 A の評価間、実習 B と統計法 B の評価間に有意な関連が見られた。一方で心理統計法 A と B の評価間の関連は有意ではなく、統計法の評価と他の情報環境、情報技能に関する質問項目との間にも関連は認められなかった。（2001 年度）

京都学園大学における調査でも 2 年生配当の心理学基礎実験 A、B の成績評価と質問項目の関連について同様の分析を試みたが、統計的に有意な関連性は認められなかった。

以上、幾つかの組み合わせについて情報環境と成績の間に関連があることが示されたが、これをもって何らかの結論を導き出すのはもちろん早計である。改めて述べるまでもなく、ここで見られた関連性は因果関係を示唆するものではないし、「パソコンをよく使っている学生は心理学実験の成績がよい」というような安易な一般化は慎むべきであろう。情報環境の積極的な役割については

さらに実証的な研究が望まれる。

学生をとりまく情報環境の変化は教育機関の関与しない領域で急激に変化している。大阪樟蔭女子大学では 1997 年度に学生の情報経験について調査を実施しているが、その時点で個人的にインターネット環境を所有している学生はほとんどいなかった。2001 年度の入学生の大半が携帯電話またはパソコンによってネットワーク社会に参入している現状から見れば隔世の感があるが、教育する側の対応は旧態依然といわざるを得ないだろう。今回の調査は大きな流れの中から一瞬を切り取ったにすぎない。将来にわたって継続的な観察、調査に取り組む必要があると考える。

（この研究は平成 14 年度、15 年度特別研究助成費の交付を受けた。）

## 文 献

- 伊原千晶・仲谷兼人・有馬淑子・行廣隆次・小嶋秀夫  
2001 心理学関連学科学生における心理学イメージ 日本心理学会第 65 回大会発表論文集, 756.
- 伊原千晶・有馬淑子・行廣隆次・小嶋秀夫 2002 心理学関連学科学生における心理学イメージの変化 日本心理学会第 66 回大会発表論文集, 1155.
- 小嶋秀夫・仲谷兼人・有馬淑子・伊原千晶・行廣隆次・川上正浩 2002 コンピュータを利用した心理学専門基礎教育プログラムの評価と開発 平成 13 年度科学研究費補助金（特定領域研究（A）（2））研究成果報告書
- 仲谷兼人・川上正浩・伊原千晶・有馬淑子・行廣隆次・小嶋秀夫 2002 心理学関連学科の情報化に関する基礎的調査 ―学生の情報環境を中心として― 日本心理学会第 66 回大会発表論文集, 1154.



資料 2002年度 調査質問紙添付 (縮小)

心理学のイメージに関する調査

この調査は、心理学を学ぶ学生の方に、心理学のイメージについてお伺いするものです。調査は心理学教育カリキュラムの改善の基礎資料をつつめることを目的としています。この調査結果が、大学の成績や個人調査などに利用されることは一切ありません。  
最初にお名前をお伺いしますが、再調査した時の結果とあわせるためのものです。本調査のデータは平均値等の統計データとして処理されるもので、個別の結果が他にもれることはありません。  
(1年生用)

大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科

学生番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_  
実施日 2002年 \_\_\_\_月 \_\_\_\_日

1まず、あなたの情報環境についてお伺いします。

- Q1 パソコンを持っていますか  
自分専用のものがある 自宅にあるを共用している 大学などの利用する
- Q2 パソコンの使い方を大学入学以前に学んだことがありますか (当てはまるものをすべて選んでください)  
学校の授業で 学校のクラブで 各種講習会などで 家族、友人などから  
自分で学んだことはない
- Q3 そこで何を学びましたか (当てはまるものをすべて選んでください)  
ワープロ 表計算 インターネット メール  
プログラミング その他 ( )
- Q4 いま、大学でのコンピュータの授業以外で、パソコンを使っていますか  
はい いいえ

使っている人にお尋ねします (Q5~Q8)

- Q5 何に使っていますか (当てはまるものをすべて選んでください)  
ワープロ 表計算 インターネット メール  
プログラミング その他 ( )
- Q6 いつ頃から使っていますか  
3年以上前 3年~2年前 2年~1年前 1年~半年前 半年以内

II 心理学についてお伺いします。

Q12 次の項目について、あなたが心理学に対して抱いているイメージに当てはまる数字を丸で囲んで答えてください。

	あてはまらない	やや	どちらでもない	やや	あてはまる
1. 心理学に興味がある	1	2	3	4	5
2. 心理学は神秘的である	1	2	3	4	5
3. 心理学は役に立つ	1	2	3	4	5
4. 血液型で性格がわかる	1	2	3	4	5
5. 顔の良し悪しは知能テストでわかる	1	2	3	4	5
6. 心理学を学べば人の心を読めるようになる	1	2	3	4	5
7. 心理学を学べば相手の性格がわかるようになる	1	2	3	4	5
8. 心理学を学べば自分の心がわかるようになる	1	2	3	4	5
9. 心理学を学べば自分の悩みが解決できる	1	2	3	4	5
10. 心理学を学べば人付き合いがうまくなる	1	2	3	4	5

Q13 心理学は以下の学問と、どの程度の関係があると思いますか?当てはまる数字を丸で囲んで答えてください。

	まったく関係ない	あまり関係ない	やや関係がある	かなり関係がある	非常に関係がある
1. 経済学	1	2	3	4	5
2. 医学	1	2	3	4	5
3. 社会学	1	2	3	4	5
4. 生物学	1	2	3	4	5
5. 数学	1	2	3	4	5
6. 法学	1	2	3	4	5
7. 教育学	1	2	3	4	5
8. 史学	1	2	3	4	5
9. 哲学	1	2	3	4	5
10. 物理学	1	2	3	4	5
11. 文学	1	2	3	4	5

Q7 週に何日くらい使っていますか  
( )日くらい

Q8 パソコンを使う日には、一日平均どれくらい使っていますか  
3時間以上 2時間以上 1時間以上 30分以上 30分以下

全目にお尋ねします。

Q9 パソコンを使って、以下の作業がどの程度できますか。当てはまる数字を丸で囲んで答えてください。

	全くできない	少しできる	かなりできる
ワープロを使った文書作成	1	2	3
表計算ソフト (Excelなど) を使ったデータの集計	1	2	3

ケイタイとパソコンを両方持っている人にお尋ねします (Q10, Q11)

Q10 次の作業ではどちらを主に使いますか

作業	ケイタイ	パソコン
メールを読む	ケイタイ	パソコン
メールを書く	ケイタイ	パソコン
インターネット	ケイタイ	パソコン

Q11 どちらを先に使い始めましたか

	ケイタイ	パソコン

Q14 以下の知識や技術、能力などは、心理学を学ぶ上でどの程度必要とされると思いますか?当てはまる数字を丸で囲んで答えてください。

	全く必要でない	あまり必要でない	やや必要	かなり必要	非常に必要
1. 一般教養	1	2	3	4	5
2. 国語	1	2	3	4	5
3. 数学	1	2	3	4	5
4. 英語	1	2	3	4	5
5. 統計	1	2	3	4	5
6. コンピュータ	1	2	3	4	5
7. 直観力	1	2	3	4	5
8. 感受性	1	2	3	4	5
9. 論理的思考	1	2	3	4	5
10. 計算能力	1	2	3	4	5
11. 外国語の習得能力	1	2	3	4	5

Q15 あなたは、これらの知識や技術、能力などをどの程度もっていると思いますか?当てはまる数字を丸で囲んで答えてください。(よく知らないものも印象で答えてください。)

	全くない	あまりない	ややある	かなりある	十分にある
1. 一般教養	1	2	3	4	5
2. 国語	1	2	3	4	5
3. 数学	1	2	3	4	5
4. 英語	1	2	3	4	5
5. 統計	1	2	3	4	5
6. コンピュータ	1	2	3	4	5
7. 直観力	1	2	3	4	5
8. 感受性	1	2	3	4	5
9. 論理的思考	1	2	3	4	5
10. 計算能力	1	2	3	4	5
11. 外国語の習得能力	1	2	3	4	5

Q16 心理学のイメージはどのようなものですか。以下の言葉の対の間で、当てはまる程度の数値に丸をつけてください。

	非常に	やや	どちら ともいえない	やや	非常に	
1. 難しい	1	2	3	4	5	簡単な
2. 新しい	1	2	3	4	5	古い
3. 浅い	1	2	3	4	5	深い
4. 広い	1	2	3	4	5	狭い
5. 暗い	1	2	3	4	5	明るい
6. 暖かい	1	2	3	4	5	冷たい
7. 厳密な	1	2	3	4	5	おおまかな
8. 有用な	1	2	3	4	5	無用な
9. つまらない	1	2	3	4	5	面白い
10. かたい	1	2	3	4	5	やわらかい
11. 鈍い	1	2	3	4	5	鋭い
12. 強力な	1	2	3	4	5	非力な
13. ゆったりした	1	2	3	4	5	張り詰めた
14. 複雑な	1	2	3	4	5	単純な
15. 単調な	1	2	3	4	5	変化にとんだ
16. いきいきした	1	2	3	4	5	生気のない
17. 静的な	1	2	3	4	5	動的な
18. 積極的な	1	2	3	4	5	消極的な
19. 面倒な	1	2	3	4	5	やりがいのある
20. 勤勉な	1	2	3	4	5	怠惰な

III あなた自身のことについてお聞きます。

Q17 次の質問について、今の自分にあてはまる場合には「はい」を、あてはまらない場合には「いいえ」を○で囲んでください。「はい」でも「いいえ」でもないと考えられる時でも、より自分に近いと思う方に必ず○をつけることとします。どちらが正しいということはないので、深く考えずに回答してください。

1. 何か仕事をするときは、自前をもってやるほうである。      はい      いいえ

2. 過去に犯した失敗やいやな経験を思い出して、暗い気持ちになることがよくある。      はい      いいえ
3. 友人よりすぐれた能力がある。      はい      いいえ
4. 仕事を終えた後、失敗したと感じることが多い。      はい      いいえ
5. ほかの人と比べて心配性なほうである。      はい      いいえ
6. 何かを決めるとき、迷わずに決定するほうである。      はい      いいえ
7. 何かをするとき、うまくいかないのではないかと不安になることが多い。      はい      いいえ
8. 引っ込み思案なほうだと思う。      はい      いいえ
9. ほかの人以上に記憶力はよいほうである。      はい      いいえ
10. 結果の見通しがつかない仕事でも、積極的に取り組んでいくほうだと思う。      はい      いいえ
11. どうやったらよいか決心がつかず、仕事にとりかかれないうことがよくある。      はい      いいえ
12. 友人よりも特にすぐれた知識をもっている分野がある。      はい      いいえ
13. どんなことでも積極的にこなすほうである。      はい      いいえ
14. 小さな失敗でも、人よりずっと気にするほうである。      はい      いいえ
15. 積極的に活動するのは、苦手なほうである。      はい      いいえ
16. 世の中に貢献できる力があると思う。      はい      いいえ

Q18 以下の専門科目から、今の時点で希望する専門分野を選択して下さい。

- 1 認知心理学      2 発達心理学      3 教育心理学  
4 臨床心理学      5 社会心理学      6 わからない、その他

Q19 あなたの選んだ専門科目(分野)は、あなたの学年の何割ぐらいの人が希望していると思いますか?推測して%でお答え下さい。

(      ) %

以上で質問は終わりです。付け書きの無いようご確認下さい。ご協力ありがとうございました。

# A Cross-Sectional and Longitudinal Study of Informational Environment and Informational Literacy Competence among Psychology Majors

Osaka Shoin Women's University

*Kaneto* NAKATANI, & *Masahiro* KAWAKAMI

## ABSTRACT

Computerization of university education is the trend of the time, and the information environment which surround students is continuing changing at the high speed.

In this research, investigation with questionnaire about the information environment and literacy capability to own was conducted in across boundaries and vertical section for the student who majors in psychology and other related subjects as basic data of the program development which meets the various demands in specialized education.

Although a steady substantial information environment and improvement in literacy capability were checked from results of this investigation, it was also shown that elements which should newly be examined, such as the rapid spread of a cellular phone and pocket mails, were added.

Moreover, examination was made also about relevance being accepted between evaluations of an information environment, literacy capability, and a basic educational subject.

**Keywords:** education of psychology, information environment, information literacy